



昭和十七年九月七日

筆者識

「」内の言葉は筆者の添削、大まか「」内のものは  
 原典著者の自註であり、小まか「」の内は堀呉引  
 用の箇所をふしつた。

2491

版を、その後の数字で其内の頁数を示し、参照の候  
 とした。  
 ③の頁数は岩波書店全集版に依つた。  
 ④は春秋社版、世界大思想全集中の佐久内政一  
 の譯に依つた。  
 併し、頁数もこの本に依つた。  
 ⑤は藤野先生全集、編纂者各位に深甚なる敬意  
 を表すためである。  
 一、この内の文章は引用文、單語は上記のと  
 同様に示し、可成り内は、  
 かし、ふしつた。しかも本論文の中心概念を  
 示す。

十行 廿四行











同時に又道義を軽んじざる者である。彼等は自ら理  
 四七五頁。生に細心なるとは喜劇役者であり  
 る所を知らずして。道義の觀念は白と進み下る（  
 して始めに享受し得るが故に——喜劇の進歩は底止す  
 従つて分化究極するが故に——此快樂は道義を犠牲に  
 劇より受くる快樂である。此快樂は生に向つて進むに  
 弄する。馬鹿にする。踏む。蹴る。——悉く萬人が喜  
 喜劇を演じて得意である。巫山戯る。驕ぐ。欺く。嘲  
 に重きを置かざる愚人は。道義を犠牲にしてあるやう  
 が。是も喜劇である。凡そが喜劇である。道義

死の修練である。死を忘るゝものは贅澤に在る。  
 一挙も生中である。一死も生中である。一挙も一投  
 足も悉く生中に在るが故に。如何に踊るも、如何に狂  
 ゐも、如何に巫山戯るも、大丈夫生中を出がらざる氣遣ひ  
 なしと思ふ。贅澤は高じて大膽となる。大膽は道義を  
 蹂躪し、大自在に跳梁する。（四七六頁）然るに死の修練  
 も、死と生との間は死の認識に在りて大膽となるので  
 ある。しかして、生に細心なるとは、栗か米か、是は  
 水は、能くなき執心、を反面に藏する。栗か米か、是は  
 喜劇である。工か扇か、是も喜劇である。栗か米か、是は  
 死の修練

十行 廿四字





の統一にありて可能なやうに。上記の説明を採つた所以であり。即ち「悟性はその（先天的）法則を自然から導き出すやうにはなくして反対に之を自然に規定するやうである（*Praktische Vernunft*, 483）」。自然の法則は自然法則であり、人間の本性は道徳律自然法則は純粹悟性概念であり、それらに對して人間の本性は道徳律であり、道徳律は純粹理性概念、即ち理念である。道徳的概念は理性がそれによつて之を自体無法則的な自由の制限を帯び、それによつて原理（道徳律）に關しては、純粹理性概念の例證として規定するに十分である（*Bentham*）。前者は

の統一にありて可能なやうに。上記の説明を採つた所以であり。即ち「悟性はその（先天的）法則を自然から導き出すやうにはなくして反対に之を自然に規定するやうである（*Praktische Vernunft*, 483）」。自然の法則は自然法則であり、人間の本性は道徳律自然法則は純粹悟性概念であり、それらに對して人間の本性は道徳律であり、道徳律は純粹理性概念、即ち理念である。道徳的概念は理性がそれによつて之を自体無法則的な自由の制限を帯び、それによつて原理（道徳律）に關しては、純粹理性概念の例證として規定するに十分である（*Bentham*）。前者は

答へる。カントによれば、法則としての悟性概念による直観の多様の綜合的統一以外の何者でもない。如何にして自然そのものは可能的であるか、といふ提題に、質料形式の二方面から解答を乞へてゐるが、具體的自然は寧ろ此の二方面

答へる。カントによれば、法則としての悟性概念による直観の多様の綜合的統一以外の何者でもない。如何にして自然そのものは可能的であるか、といふ提題に、質料形式の二方面から解答を乞へてゐるが、具體的自然は寧ろ此の二方面

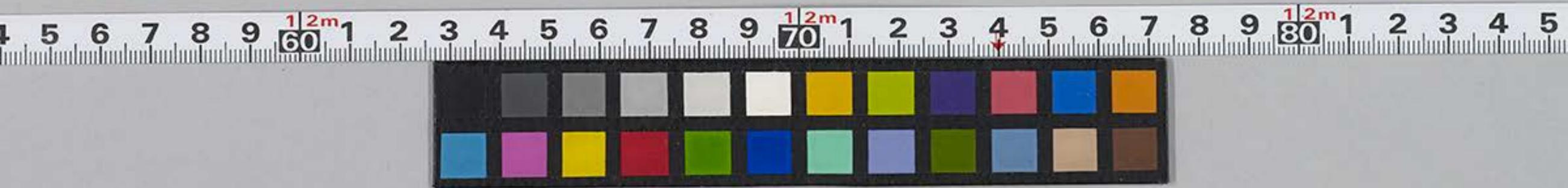
十行 廿四字詰





眞面目になつて始めて得らるる自覚だ(四三九頁)  
 事はな。天地の前に自分が儼然として居ると云ふ觀念  
 下にな。眞面目になつた程精神の存在を自覚する  
 自信力の出た子にな。眞面目になつた程腰が据わ  
 るからと言つた方が適當だ。眞面目になつた程  
 時々眞面目になつたから言ふ。眞面目になつた程  
 負たのは、學問の存でも、勉強の存でも、何でもな。平  
 所以の「良心」にはなからうか。僕が君(小野さん)よりも平  
 呼ばれらるが、<sup>「人向」</sup>「人向」も「中一義」に於て行なせしむる  
 I feel, I feel, 3. Hauptabsicht. 「人類性 (Menschheit) 精神」  
 呼ばれらるが、<sup>「人向」</sup>「人向」も「中一義」に於て行なせしむる

存在者自身が、斯かる原理の手引によつて、かゝる自身  
 及び同時に他の存在者の持続的福祉の創始者たりし  
 べきありうから(B. 830)。然し「之」も實現するには各人が  
 べき存心すべき所ありぬべきを存す。云々換へれば、理  
 性的存在者のありゆる行なふべきも、<sup>「本」</sup>「本」が条件とせしむる  
 意志の實現するかの如く、<sup>「本」</sup>「本」が条件とせしむる  
 ぬる(B. 830+)。二二に「最上位の意志」(ein oberste Willen)  
 と稱せしむるものは又「最上位の意志」(eine höchste Vernunft)  
 (B. 830+) 「人格性 (Personalität)」 「理想的性格 (intelle-  
 gualer Charakter) B. 567」 「人格性 (Personalität) K.d.P.V.  
 十行 廿四字詰



と云ふのは、得た彼は、少くとも其の國の賓客には度々なつてゐたのである。

「道德的世界」に於ては、徳と幸福との一致に於ける最善（Das höchste Gut）が獲得せられた（B. 838. 4）。カントに從へば「哲學とはその名（Philosophie）が示してゐるやうに Weisheit である。Weisheit とは究極目的（最善）への意志の調和である（PB. 466 D. S. 344. 1）而して Weisheit とは、人倫にとつて、道德的法則に從ふ意志の内的原理以外の何者でもない（ibid.）」

「實踐理性批判」の批判的検査（K. d. V. V. I Teil, I Buch, 3 Hauptstücke

と宗近君が云ふ時、「眞面目とは、第一義に則つた良心的行動のことであり。『平氣』であるとか、『天地の前に自らの儼存も自覚』といふとか云ふのは、道德的世界（目的の王国 [reines Reich der Zwecke]）又は、ライプニッツの所謂「徳の國」[Das Reich der Gnaden (B. 841)] の住民となつた時の実感なりであり。勿論しかし宗近君は「道德的世界」の市民権を獲得してゐた訳ではなからぬ。甲野さんにいはせれば、たゞ「徳」を下つてゐるうち（九九頁）だけが其處の「眞」なりである。それにしては、鬼に角。『肝膽相照』する

と云ふのは、片豆に第一義が活動するからたうたう（九九頁）

十行 廿四字詰



宗近君は、才十義に止つてゐる小野さんの上段を一枚

宗近君は小野さんの由宿へ集り込んた(四三三頁以下)。

才十義に於ける行爲が生んた諸悪を粉碎せんとして

五

と思ふ。

子か！ ① 才十義に就いて更に向ひたしこ見たい

と活動する。と云ふこと、<sup>所以であるか</sup>一体如何様に振舞ふことか

民権を獲得しなけりばならぬ。和は米一義にあり

故に哲學者の義務がある。哲學者は、<sup>如何に</sup>道德的世界の市

ことか、<sup>こゝに</sup>あつた。才一義にありて活動すること、その

ふことは、他の言甚だしいは、才一義にありて活動する

の市民権を獲得しなけりばならぬ。良心的であるとい

な義務がある。かくて哲學者は、道德的世界

に於ける基本的な資格であると共に、不可解的

なわけならぬ。云々換へれば、良心的であるといふ

定せらるる以上、哲學者はあくまで良心的存在にな

に他ならぬ。かくて哲學家が *Moralität* としての規

によれば、良心も亦道德的法則に従ふ意志の内の原理

*kritische Besinnung* (wov.) に於ける良心に關する記述

十行 廿四字



口が巧者に働いたり、手が小器用に働いたりするのには、負の意味がよ。人向全体が活動する意味がよ。小器現れにありの真面目とはね、君、真面目。子かも知れたいが、実に生き生きとした姿を以てして、近君には、比量的判明性や概念的普遍性には缺けてゐる。第一義を説き及ぼし、今正に第一義を行じてゐる宗を、心には、風を無理な論である。それと見て宗近君は、と更に述べ、しかし、第一義をかり廻つてみた小野、形にならうのは勿体ない。真面目になつた後は心持がい、ものたよ。君にさう云ふ経路があるか、(四三八頁)。と更に述べ、しかし、第一義をかり廻つてみた小野、と更に述べ、しかし、第一義をかり廻つてみた小野、

一枚と剥いて、その第一義に迫つて行く。そして遂に、軽薄な小野さんに生れ附きながら仕方がないです(四三八頁)。と本音を吐かせる。しかし宗近君は、進求を止め、な、か、う云ふ危い時に、生れ附きも敲き直して置かないと、生涯不安で仕舞ふよ。いくら勉強しても、いくら学者になつても取り返しは附かない。此處だよ、小野さん、真面目にならうのは、世の中に真面目は、ど、人なまのが一生知らずには済んで仕舞ふ人向が幾何もある。皮丈の生きて居る人向は、土丈で出来てゐる人形とさう違はない。真面目がなければだが、あるのは人

十行 廿四字



甲野文人が子件りカクストに加へた註解に大抵は、  
 人生の第一義は道義にありとの命題を胸裏に樹立する  
 が故に偉大なり所の悲劇は、又「巫山戯た」の急  
 に「標」を正すの偉大なり。標を正して道義の必要を  
 今更の如く感ずるから偉大なり。四七五頁。「生か  
 死か。是が悲劇である（全頁）。生死の肉題に直面せしめ  
 ることによつて、悲劇は巫山戯たる者を眞面目にし、  
 彼等を第一義に復帰せしめる。悲劇は「まこと  
 に」死の修練である。第一義は實に「死の修練」に於て  
 めき出づるものである。哲學家は此の意味に於て第一

は「その中には」  
 本領が發揮されると共に、他方「道德世界」即ち「恩寵の國」  
 と「理念」が結合なりとも此の世に實現さるゝ人々  
 あり。第一義は「死」の活動するところ、一方「肉」の  
 活動するところ、  
 〇眞。然らば、第一義に於いて活動するとは、人肉全  
 くと當人が助かり計りぢやない。世の中が助かり（四四  
 ・、君も此際一度眞面目になれ。人一人眞面目にな  
 世の中へ高まつけの始めと眞面目になつた氣持になる。  
 いくら働いたつて眞面目ぢやない。頭の中を遺憾なく  
 活動せしめ、  
 〇眞。然らば、第一義に於いて活動するとは、人肉全  
 くと當人が助かり計りぢやない。世の中が助かり（四四  
 ・、君も此際一度眞面目になれ。人一人眞面目にな  
 世の中へ高まつけの始めと眞面目になつた氣持になる。  
 いくら働いたつて眞面目ぢやない。頭の中を遺憾なく  
 活動せしめ、

十行 廿四字詰





存する。実践的内心に於ては徳と幸福との何れかを  
 その究極原理として掲げ、理論的内心に於ては自由と  
 必然との何れかを主張して、<sup>和</sup> ~~其處~~ <sup>中</sup> ~~に~~ <sup>を</sup> ~~其處~~  
 に闘争の一大絵巻を展開し来た。哲学の丁度には、  
 偉大な人肉悲劇である。かくて、<sup>考へ</sup>  
 する時、哲学は此の修練<sup>の</sup> ~~の~~ <sup>なく</sup> ~~なく~~ <sup>何</sup> ~~何~~ <sup>であらう。</sup> ~~は~~ <sup>死</sup>  
 修練とは何なることか。  
 エピクテリトスは云ふ。世に存在する下物のうちで  
 或ものは吾等自身<sup>の</sup> ~~の~~ <sup>内に</sup> ~~内に~~ <sup>存し、</sup> ~~或~~ <sup>は</sup> ~~は~~ <sup>吾等自身</sup>  
 の力では如何と云ふべきか。

自らに肉体的幸福のみを求めた所には悲劇は自覚さ  
 ない。悲劇は自己の運命の自覚を常に伴ふものあり。  
 その自覚の故に又、よ／＼悲劇的性格は深みゆく。  
 自覚なき悲劇<sup>の</sup> ~~の~~ <sup>如きは、</sup> ~~その~~ <sup>故に</sup> ~~一~~ <sup>つの</sup> ~~形容~~ <sup>矛盾</sup> ~~の~~ <sup>可</sup>  
 らる。悲劇の自覚さるる時は同時に悲劇は存在し  
 ない。 <sup>又</sup> ~~又~~ <sup>徳と</sup> ~~徳と~~ <sup>幸福と</sup> ~~幸福と~~ <sup>が</sup> ~~完全~~ <sup>な</sup> ~~比~~ <sup>例</sup> ~~的~~ <sup>調</sup> ~~和~~ <sup>に</sup> ~~於~~  
 て最高善を現成する時、其處には神の恩寵に輝く崇嚴  
 劇が見られ、<sup>に</sup> ~~に~~ <sup>す</sup> ~~す~~ <sup>た</sup> ~~た~~ <sup>る</sup> ~~る~~ <sup>。</sup> ~~一方~~ <sup>自然</sup> ~~的~~ <sup>傾</sup> ~~向~~ <sup>性</sup> ~~に~~ <sup>よ</sup> ~~る~~ <sup>。</sup>  
 活意性も規定さるる。他方道德律の束縛無上命令に  
 従つて生存を遂行せんとする所に、人肉存在の悲劇<sup>性</sup> ~~性~~ <sup>に</sup>

十行 廿四字節



即ち吾等の力の内に存するもの及び存せざるものは就  
 この彼自らの意見に信頼していある。何となれば、  
 この下に就いての意見こそ、人をして自由無礙ならし  
 め、抑へらるる人に頭を擧げさせ、富者も暴君の顔  
 もがたと見えさせるものだからである。そして水は折  
 受者の賜物であつた(第一卷 中八章 九七頁)。「文火は  
 吾等の力の内に存せざるものに対して風や火を嫌悪せ  
 避けよ。而しておんみの力の内に存し、同時に反自然  
 的であるやいなもの【こころ】は、  
 本性に恃まふこと。ストップの派の *Naturalismus* が考慮に入

*Naturalismus*

"natura"

第五章 四(頁)「内的の決心と外界の事物とを、同時  
 に確く把持することには、容易ではな(第一卷 第一七  
 章 一一五頁)。「おんみは内的(の生活)及外的(の生活)を考  
 へて、おんみ自身の最も高貴なる部分(悟性・理性・靈性)を  
 完成するが、或はおんみの外部を完成するが、  
 ない。即ち一個の哲人があるか、或は一個の俗になけ  
 ればならぬ(第一卷 第一七章 一二七頁)。「山の住居  
 から来た獅子の如くに、己が勇氣を信じてオデッセイは  
 往く(オデッセイ、六の一三〇) 何を信じてか? 名聲で  
 も財産でもなく、彼自身の勇氣を信じてである。|  
 |

十行 廿四字



関心が有る(第一卷) 第五頁 八四頁 漱石も確かに同  
 見の有様は奥しとは無頓着であり、不注意であり、  
 拙等は死を恐れぬ道志するが、死に就くその意  
 に吾等の今やつてあるのは、それと反対である。即ち  
 対しては細心を差向けるのは当然の子である。しか  
 しては水は吾等が死に對しては大胆で、死の恐ろし  
 痛や死に對する恐怖が、恐ろしいものだからである。  
 何とな水は、死や苦痛は恐ろしいものではない。苦  
 しみ、不安に陥れられ、煩悶せしめられるのである。  
 うと努力するのだから、それと水によつて必然的に脅か  
 され、不安に陥れられ、煩悶せしめられるのである。  
 何とな水は、死や苦痛は恐ろしいものではない。苦  
 しみ、不安に陥れられ、煩悶せしめられるのである。  
 うと努力するのだから、それと水によつて必然的に脅か

用ゐるならば、彼は他人の力の内にあり、  
 力の内に存せざる、また吾等の意志を超越せるもの  
 持つてあり、しかるに若し彼が、その力を吾等自身の  
 意圖と共に、直ちにまたそれをなすことを避ける力を  
 志の所作の領域に移すならば、悪をなすことを恐るゝ  
 四七頁)。「若し他人がその水の細心を、意志の領域を以て  
 するに限定する規準となるのであるが、  
 水の嫌惡せられるは、しむるやうにせよ(第一卷、  
 自然法則は道德律の「Tugend」の役目をなすこと、  
 水は水はなすべからぬのである。勿論カニトはありても、  
 自然法則は道德律の「Tugend」の役目をなすこと、  
 水は水はなすべからぬのである。勿論カニトはありても、

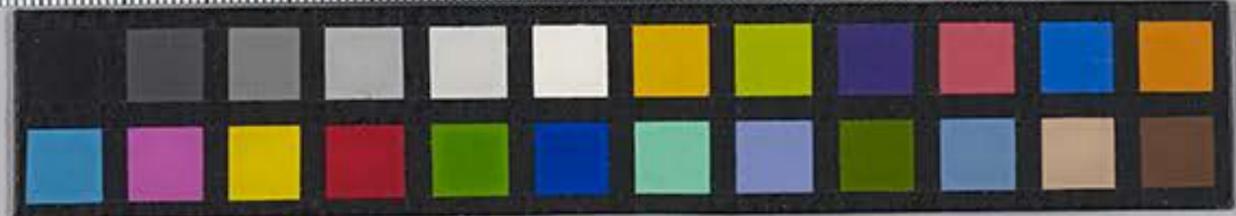
十行 廿四字



社会を満足に維持しがたき時、悲劇は突然として起る。  
 是に於て万人の眼は悉く自己の出立点に向ふ。始りて  
 生の隣に死が住むを知る(四七六頁)。死の修練とは  
 自己の出立点に眼を向け、生の隣に死が住むこととて  
 自覚することがある。豊富なストP的教養を身に体し  
 ておいたモンテスキュー、其の「随想録」で「哲学する目的は死  
 に方を学ぶにあること(オニオ章)」といふ主題を追求して  
 ゐるが、その冒頭に「キレにはは哲学するとは死に  
 備ふることには他ならぬ」といふた。蓋し、研究と静観と  
 は、いはば五等霊魂を五等の外部に引出し之を肉体

じ原理を見ぬ。つみた(勿論)彼の處女作ともいふべき  
 瀧石はエピソードに随分教はる所があった。たが、  
 既に引用した次の言葉は、その證左にある。  
 「死を忘る、<sup>まの</sup>は贅澤になる。一浮も生中である。一沈  
 生中である。一草平も一段足も悉く生中にあるが故  
 に、如何に踊るも、如何に狂ふも、如何に巫山戯るも、  
 大丈夫生中を出つた氣遣ひなしと思ふ。贅澤は言ひて  
 大膽となる。大膽は道義を蹂躪して大自在に跳梁する。  
 、道義の觀念が極度に衰へて、生を欲する萬人の

十行 廿四字詰



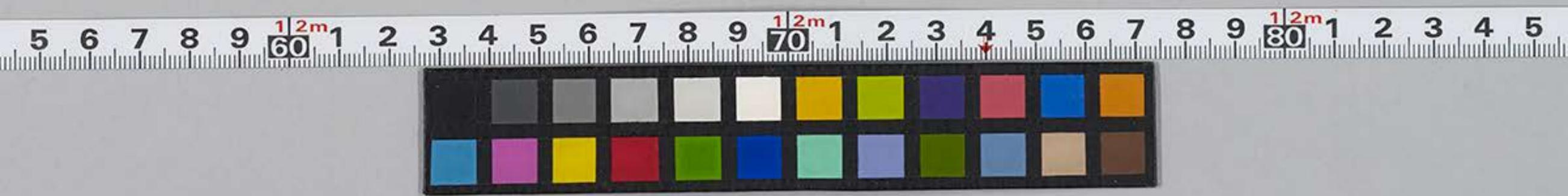




凡そ経験的制約を無視して異つた限定を与へ得た  
 何故か。それは二の實際性は人間の行動に右に述べ  
 ことと信ずる。それは拘らば行動者を非難する(白紙)  
 である。さて人は行動がこれに依つて限定せられ  
 して限定的原因の系列を探索する場合におけると同じ  
 水準の仕方。一般に与へられた自然の結果に對  
 して種縁を与へる社会原因はその際看過せられな  
 性。これに對し、一部は軽率と無思慮とは歸する。行  
 には、一部はまた羞恥に對して無感覺な氣質の邪惡  
 精査し、二の源泉も不適當な教育。言惡に充ちた社会

には人々は行動者の経験的性格もその源泉まで溯つて  
 存着に歸せられ得ることと判定する。才一の真に實し  
 突し、然る後に、この行動がそれに伴ふ結果と共に行  
 が、人は先づこの行動を惹起した動因に因して之を研  
 よつて社会に混乱を招来した一つの任意的行為である  
 惡意ある虚言をとり擧げ(その目(0.5.82))。これは人がそれ  
 カントは此の事を解明する爲に、例證としてこの  
 惡意ある虚言をとり擧げ(その目(0.5.82))。これは人がそれ

十行 廿四学語





心内の  
世内を  
記す。

No.

單に人間が可憐の性格のみを有つたならば、  
 道德的  
 11  
 10  
 帰責すると共に自己の行爲を帰責しなけければならぬ  
 する者は此の可憐の原因性 (S. 50) に本質的にある以上、  
 眞が可憐の性格として良心にあり以上、  
 高尚な人間たる  
 必然性に帰することは許されないのである。人向の本  
 彼は平素。道德的な要も、生火附きとか環境等の自然  
 21  
 20  
 19  
 18  
 17  
 16  
 15  
 14  
 13  
 12  
 11  
 10  
 9  
 8  
 7  
 6  
 5  
 4  
 3  
 2  
 1  
 0  
 1  
 2  
 3  
 4  
 5  
 6  
 7  
 8  
 9  
 10  
 11  
 12  
 13  
 14  
 15  
 16  
 17  
 18  
 19  
 20  
 21  
 22  
 23  
 24  
 25  
 26  
 27  
 28  
 29  
 30  
 31  
 32  
 33  
 34  
 35  
 36  
 37  
 38  
 39  
 40  
 41  
 42  
 43  
 44  
 45  
 46  
 47  
 48  
 49  
 50  
 51  
 52  
 53  
 54  
 55  
 56  
 57  
 58  
 59  
 60  
 61  
 62  
 63  
 64  
 65  
 66  
 67  
 68  
 69  
 70  
 71  
 72  
 73  
 74  
 75  
 76  
 77  
 78  
 79  
 80  
 81  
 82  
 83  
 84  
 85  
 86  
 87  
 88  
 89  
 90  
 91  
 92  
 93  
 94  
 95  
 96  
 97  
 98  
 99  
 100

100  
 99  
 98  
 97  
 96  
 95  
 94  
 93  
 92  
 91  
 90  
 89  
 88  
 87  
 86  
 85  
 84  
 83  
 82  
 81  
 80  
 79  
 78  
 77  
 76  
 75  
 74  
 73  
 72  
 71  
 70  
 69  
 68  
 67  
 66  
 65  
 64  
 63  
 62  
 61  
 60  
 59  
 58  
 57  
 56  
 55  
 54  
 53  
 52  
 51  
 50  
 49  
 48  
 47  
 46  
 45  
 44  
 43  
 42  
 41  
 40  
 39  
 38  
 37  
 36  
 35  
 34  
 33  
 32  
 31  
 30  
 29  
 28  
 27  
 26  
 25  
 24  
 23  
 22  
 21  
 20  
 19  
 18  
 17  
 16  
 15  
 14  
 13  
 12  
 11  
 10  
 9  
 8  
 7  
 6  
 5  
 4  
 3  
 2  
 1  
 0  
 1  
 2  
 3  
 4  
 5  
 6  
 7  
 8  
 9  
 10  
 11  
 12  
 13  
 14  
 15  
 16  
 17  
 18  
 19  
 20  
 21  
 22  
 23  
 24  
 25  
 26  
 27  
 28  
 29  
 30  
 31  
 32  
 33  
 34  
 35  
 36  
 37  
 38  
 39  
 40  
 41  
 42  
 43  
 44  
 45  
 46  
 47  
 48  
 49  
 50  
 51  
 52  
 53  
 54  
 55  
 56  
 57  
 58  
 59  
 60  
 61  
 62  
 63  
 64  
 65  
 66  
 67  
 68  
 69  
 70  
 71  
 72  
 73  
 74  
 75  
 76  
 77  
 78  
 79  
 80  
 81  
 82  
 83  
 84  
 85  
 86  
 87  
 88  
 89  
 90  
 91  
 92  
 93  
 94  
 95  
 96  
 97  
 98  
 99  
 100

十行 廿四字

Kyoto University













